

「分析哲学者の典型的なふるまいはどこから来るのか」

秋葉 剛史 (千葉大学)

本提題では、主に分析哲学の領域で研究をしている者の観点から、その研究活動の実態、研究の評価基準、教育の可能性といった事柄について話してみたい。もっとも先に断っておくと、提題者は決して「分析哲学」と総称される領域のすべての動向に通じているわけではないし、自分が従っている（はずの）方法や規範などについて普段からそんなに自覚的なタイプでもない。そのためここでの話は、あくまで分析哲学という巨大な営みの一部に携わる者の目から見た、限定的かつ暫定的な分析哲学像である。

分析哲学の方法、ないしその議論の進められ方を特徴づけるには、それが分析哲学者以外の者にどう映っているかをみるのがよい出発点になりそうだ。おそらく昔ほどではないだろうが、分析哲学に対しては一般に次のようなイメージがもたれがちであるらしい (cf. S. Overgaard et al. (2013) *An Introduction to Metaphisophy*, ch. 5)。つまり分析哲学は、我々にとって現実に重要な諸問題よりも言語や論理に関する些末な区別に拘泥しているとか、わかりきったことに対してもわざわざ論証を与えようとするとか、用語法や主張の定式化に関して神経質なまでにうるさいとか、厳密性や明晰性の題目のもと論理式や記号をやたらと使いたがるとか、そういったイメージだ。

こうしたイメージは、(そこに込められた否定的感情や過度の単純化を抜きにすれば) 必ずしも不適切なものではなく、それぞれ分析哲学という実践のある側面を捉えていると思う。実際、分析哲学者たちの大部分は、区別や論証や明晰さに強いこだわりをもっているし、そのこだわりを互いに要求し合っている。だがそうだとすると、次に考えるべきは、なぜ分析哲学においてはそのようなこだわりが共有されているのか、なぜそれらが研究活動の方法的規範として通用しているのか、という点だろう。もしこの問いに答えが得られれば、分析哲学という営みの根底にある動機に光が当たることになり、なぜ分析哲学が現にそのような仕方で進められているのかも明らかになるはずだ。

そこで本提題では、「理論化」という契機に焦点を当てて上の問いに部分的な解答を与えてみたい。つまりここで注目したいのは、分析哲学者たちは（ある程度）包括的な理論を構成することを通じて物事を理解することを最終的な目標として研究に臨んでいる、というポイントだ。「理論化を通じた理解」というこの目標は、言語哲学や論理哲学、形而上学といった分野で特に明示的に追求されており、少なくとも分析哲学の典型的な営みの一部を性格づけるものだと言ってよいと思う。シンポジウム当日は、まさにこの目標を背景において分析哲学を見直すことで、それに特徴的な方法や評価基準のかなりの部分が理解可能になることを示し、あわせてその教育可能性についても論じる予定である。